

研究発表もうしこみフォーム

氏名：笹田 朋孝・L. イシツェレン

氏名のローマ字表記：Sasada Tomotaka、L. Ishtseren

所属：愛媛大学法文学部、モンゴル科学アカデミー考古学研究所

専門分野：考古学

発表のタイトル：ハジュー・ボラグ遺跡（モンゴル国ヘンティ県ダダル郡）の発掘調査とその成果

発表要旨（600字～800字程度）：

発表者らが発見したホスティン・ボラグ遺跡（モンゴル国トゥヴ県ムンゲンモリト郡）の発掘調査を嚆矢に、近年モンゴル国内では古代の製鉄遺跡が数多く発見され、遊牧民が自ら鉄を生産していたことが明らかとなっている。またその技術系譜も中国産のものではなく、草原地帯を西から東に伝播し、この地域に適応・発展したものであることも明らかとなってきた。これらの製鉄遺跡の殆どが匈奴の時代（BC2世紀～AD1世紀）に属するもので、遊牧帝国の勃興を考える上で重要な視点を提供している。その一方で、匈奴以降の製鉄遺跡についてはアルタイ地域を除いては判然としていない状況であった。

今回報告するハジュー・ボラグはテムジンの「産湯の井」として知られており、小川を挟んでその対岸には「デリウン・ボルダグ」を望むことができる。数年前に地元の文化財担当者から泉の崖面からスラグが出土していることが、モンゴル科学アカデミー考古学研究所に情報提供された。そして新潟大学の白石典之教授らの現地踏査の成果を受けて、2023年と2024年に発掘調査を実施した。3基の製鉄炉を発掘し、これまでモンゴル草原で見つかっていた製鉄炉とはその構造が大きく異なっていることが判明した。また炉内で採取した木炭の較正年代は紀元後3世紀～5世紀ごろであった。調査事例の希薄であった時代であり、出土した土器も含めて、極めて興味深い調査成果であった。

本発表ではその詳細を述べるとともに、これまで実施してきた研究成果から匈奴から大モンゴル国時代に至るモンゴル草原の鉄生産史について概観したい。